

20 世紀初期における民謡を巡る議論に見る文化的「ベルギー性」の二元性

大迫知佳子

本論文は、20 世紀初期ブリュッセルにおける「ベルギー」を冠した民謡関連書の記述内容をその周辺の講演録・雑誌記事等の記述内容も含めて分析・整理・比較することを通して、「ベルギー」民謡における「ベルギー性」がどのように説明づけられていたのかを明らかにするものである。分析の対象は、『ベルギー各地方の民謡集』、『ベルギー民謡』、そして『ベルギーにおける九つの地域の民謡集』とする。

世紀転換期のベルギーでは、音楽における文化的アイデンティティを民謡に見出す論が現れ始め、上記のようなタイトルを持つ民謡関連書が残された。この動きは、ベルギーの古い民謡を研究・収集・保存・伝承するための国家政策へと繋がっていく。このように、文化的アイデンティティの源泉となり、国家政策として重要視されたはずのベルギーの民謡に関する先行研究は乏しい。近年、シェイフ（2018）がベルギー各地方の民謡を取り上げたが、彼は、芸術音楽におけるフランデレン的なものやワロン的なものの創出にそれらの民謡がいかにして活かされたかという文脈で論じている。しかし、上記「ベルギー」の民謡関連書の記述からは、音楽家達が民謡そのものにおける「ベルギー性」を巡って国と地方との間を揺れ動く様を見て取ることができる。

本論文では、近代西洋における国家／民族主義的文化を背景としたこの時期に、ベルギー民謡を巡る「ベルギー性」の二元性があったこと、この二元性にはフランデレン民謡とワロン民謡との関係や、それらと隣国の民謡との関係等における様々な対照性・連繋性が内包されていたことを示したい。ここで確認できた、異なる民族的な根源を一つに結び付けるための音楽家達の思索の交錯は、同時期のベルギーで希求された「ベルギー楽派」確立を困難したことの裏づけの一つともなるだろう。